

使徒パウロの祈り

塙本 恵

I. 始めに

II. 使徒パウロの祈り

- (1) 使徒パウロの祈りについての語群
- (2) 感謝、祈願、そしてとりなし
- (3) 祈りの機能とコミュニケーション

III. 結び 一現代における祈り一

I. 始めに

近年、使徒パウロに関する研究が加速度的に増大している¹。史的パウロであれ²、その神学であれ³、あるいは特殊研究であれ⁴、膨大な文献とな

¹ 数多くある中で、次を参照。Becker, J., *Paul: Apostle to the Gentiles*. (Louisville, Ken.: Westminster / John Knox Press, 1993). E.P.サンダース『パウロ』(土岐健治・太田修司訳) 教文館、1993年; 原口尚彰『パウロの宣教』教文館、1998年; 朴憲郁『パウロの生涯と神学』教文館、2002年

² Luedemann, G., *Paul, Apostle to the Gentiles. Studies in Chronology* (Philadelphia: Fortress, 1984). Murphy-O'Conner, J., *Paul: A Critical Life*. (New York et al.: Oxford, 1996). Hengel, M. & Schwemer, A.M., *Paul: Between Damascus and Antioch. The Unknown Years* (Louisville, Ken.: Westminster John Knox Press, 1997). Witherington, Ben III., *The Paul Quest. The Renewed Search for the Jew of Tarsus*. (Downers, Ill.: InterVarsity Press, 1998). Crossan, J.D. & Reed, J.L., *In Search of Paul*.

っている。しかしその中でも、使徒パウロの祈りに関する本格的な研究は、それほど多くはないのが、現状である⁵。

さて、使徒言行録における使徒パウロ像は、祈る姿に彫塑されている⁶。たとえば、復活の主イエスに出会った、いわゆる回心／召命の時点で⁷、「今、彼は祈っている」し(9:11)、フィリピの獄中で(16:25)、またエルサレム神殿で(22:17)、あるいはブブリウスの父親の癒しのために祈っている(28:8)。しかし、この像(イメージ)は、福音書記者ルカによる構成であると考えられる⁸。そこで本小論では、R.N.ロングネカーに従って、むしろ使徒パウロの書簡による「祈り」に言及したいと考えている。

本小論は、使徒パウロの祈りの神学の構築を目指している。「祈り」の神学が、祈りのないところに存在しないことは承知しているが、聖霊の働きを待

How Jesus' Apostle Opposed Rome's Empire with God's Kingdom. (San Francisco: Harper, 2004).

³ Lovering E.H.Jr., & Sumney, J.L.(eds.), *Theology & Ethics in Paul and His Interpreters*. (Nashville: Abingdon, 1996). Dunn, J.D.G., *The Theology of Paul the Apostle* (Grand Rapids, Mich.: Eerdmans, 1998). Strecker, G., *Theology of the New Testament* (Louisville: Westminster John Knox Press, 2000), pp.9–216.

⁴ G.タイセン『パウロ神学の心理学的側面』(渡辺康麿訳) 教文館、1990年。清水哲郎『パウロの言語哲学』岩波書店、2001年; アラン・バディウ『聖パウロ—普遍主義の基礎—』(長原豊/松本潤一郎訳) 河出書房新社、2004年 Adams, E. & Horrell, D.G.(eds.), *Christianity at Corinth. The Quest for the Pauline Church*. (Louisville/ London:Westminster John Knox Press, 2004).

⁵ 使徒パウロの祈りに関する文献は、次を参照。Berger, K., “Gebet. IV: Neue Testament”, *TRE* vol.XII(1984). pp.47–60. Karris, R.J., *Prayer and the New Testament*. (New York: The Crossroad Publishing Company, 2000). Gebauer, R., *Das Gebet bei Paulus* (Giessen: Brunnen Verlag, 1989).

⁶ Longenecker, R.N.(ed.), *Into God's Presence. Prayer in the New Testament*. (Grand Rapids, Mich.: Eerdmans, 2001), p.203.

⁷ 拙論を参照していただければ幸いである。”The Conversion/Call of St.Paul in the Acts of the Apostles.”『大阪私立短期大学協会研究報告集』第29集(1992年)、7–12頁

⁸ C.H.タルバート『ルカ文学の構造—定型・主題・文学類型—』(加山宏路訳) 日本キリスト教団出版局、1980年; 加山久夫『使徒行伝の歴史と文学』ヨルダン社、1986年参照。

ちつつ、祈りをもって学的論究を行いたいと思う。

そこで、基本的には、「祈り」に関する実践的な諸問題に対する言及⁹や、実践神学的な取り扱いでもなく¹⁰、むしろ聖書神学的な方法論を使用したい¹¹。さらに使徒パウロの真性とされる七つの書簡群に限定して¹²、いくつかの箇所に言及したいと願っている。

さらに「ポスト・モダン」と呼ばれる時代の中にあって¹³、神学においても、これまでの研究成果に対する反論・批判が行われている¹⁴。私たちも、福音主義における、21世紀における「新しい聖書解釈」を目指したいのである。

II. 使徒パウロの祈り

(1) 使徒パウロの祈りについての語群

さて、使徒パウロの祈りについての語群に関しては、おおよそ次のように言うことができよう¹⁵。

(i) 動詞 προσεύχομαι は、新約聖書には 85 回用いられている。

そのうち、使徒パウロには 12 回出る。ロマ 8:26、I コリ 11:4-5（2回）、I コリ 11:13、I コリ 14:13-15（5回）。フィリピ 1:9。I テサ 5:17、5:25。（第二パウロ書簡では、7回。II テサ 1:11、3:1。エフェ 6:18。コロ 1:3、9、

⁹ たとえば、ジョン・B.カブ.Jr.『とりなしの祈り』（延原時行・延原信子訳）ヨルダン社、1990年参照。

¹⁰ P.T.フォーサイス『祈りの精神』（斎藤剛毅訳）ヨルダン社、1969年参照。
O.ハレスビー『祈りの世界』（鍋谷堯爾訳）日本キリスト教団出版局、1998年参照。

¹¹ O.クルマン『新約聖書における祈り』（川村輝典訳）教文館、1999年

¹² Brown, R.E., *An Introduction to the New Testament.* (New York et al.: Doubleday, 1997), pp.407-680.

¹³ 宇田進『現代の福音主義神学』いのちのことば社、2002年参照。

¹⁴ Countryman, L.W., *Interpreting the Truth. Changing the Paradigm of Biblical Studies.* (Harrisburg et al.: Trinity Press International, 2003).

¹⁵ 荒井寛・H.J.マルクス監修『新約聖書釈義事典』（教文館、1995年）、199-205頁

4:3。I テモ 2:8)。

その名詞形 προσευχή は、新約聖書には 36 回、そのうち使徒パウロには、8 回出る。ロマ 1:10、15:30。I コリ 7:5。フィリ 4:6。I テサ 1:2。フィレ 4、22。（第二パウロ書簡では、6回。エフェ 1:16、6:18。コロ 4:12。I テモ 2:1、5:5）。この聖書以外ではまれにしか出ない προσευχή は、旧約聖書「テフィッラー」の訳語なのである（ヒトパレルとして、69 回出る）。

προσεύχομαι は、δέομαι とは区別して理解したい¹⁶。後者は、特別な嘆願的な祈りや実際に祈り求められていることとして、総合的な祈り全般である。他方前者は、①祈りの事実が強調されている（したがって実際の内容はなくてもよい）、②嘆願（コロ 1:3、II テサ 1:11）や、習慣としての祈り（フィリ 1:4）を意味する、そして③たしかに δέομαι との交換が可能なのである。

(ii) この語群は、新約聖書では、祈ることとして願い求めるなどを表する他の用語群の中で、最も頻繁に使用されている（合計 121 回）。

他の語群は、こうである。εὔχομαι 7回。εὔχή 3回。αἰτέω 70回。ἐρωτάω 63回。προσκυνέω 60回。εὐλογέω 42回。εὐχαριστέω 38回。δέομαι 22回などである。

旧約聖書（七十人訳）と同様に、新約聖書では、「祈る」「言葉にして祈る」「何かを／誰かのために」願い求めるという意味となる。

さらに名詞形では、「祈り」「執り成しの祈り」、あるいは「共同の祈りが執り行われる場所」としての「祈祷所」、そして聖書以外では、「祈りの家、シナゴーグ」をも意味するのである。

(iii) その構文での用法として、次を挙げることができよう。

a. 絶対用法としては、新約聖書には約 50 回の例がある。「祈る」「言葉にして祈る」「賛美する」という意味で（I コリ 11:4-5、14:14b。I テサ 5:17）、したがってこれは、神に向けられた祈りなのである。ロマ 15:30 では、「神に」となっている。I コリ 11:13 では、与格で、「神に」とされている。

¹⁶ TDNT, pp.807-808.

b. 例えば与格によって、祈りの方法が定められている。「異言で」「靈で」「理性で」(Iコリ14:14a, 15[2回])、あるいは「絶えず」祈る(Iテサ5:17)のである。

c. ただし使徒パウロには、祈りの細かい状況の描写は存在しない。また、「祈り」の言葉の内容も出ないのである。ただ、「祈りの時間」あるいは場所などが示されるだけなのである。

とすれば、私たちの課題として、使徒パウロの書簡に出ないものを求めるることはできない¹⁷(カリス参照)。むしろ、物語としての「祈り」を探求するか、あるいは、その書簡から、その構造の一部の考察にとどめることのみ可能であろうと思われる。

(2) 感謝、祈願、そしてとりなし

使徒パウロの祈りを分類すると、①感謝、②祈願、③とりなし、④讃美、⑤祝祷となるであろう¹⁸。しかし本小論では、すべてを網羅することはできないので、三つに限定してみよう。

①パウロは、特別な依頼や目的に基づいて、感謝をささげている(ロマ15:5-6、フィリ1:1-11、Iテサ3:11-13、5:23)。その祈りの根拠はキリストにおける神の啓示にあり、それに対して「アーメン」と答える(IIコリ1:20)。そこでは、神とキリストの眞実に対する応答がある(ロマ15:5、Iコリ1:9、Iテサ5:24)。

そしてパウロは、恵みと感謝として祈っているのである(Iテサ1:2、3:9、5:28、ロマ1:8、Iコリ1:4、フィリ1:3-4、フィレ4-6)。

②使徒パウロにおいて、祈りは祈願である。祈りにおいて、神は私たちに、すべてを備えたもう(ロマ10:12、IIコリ9:8-9、フィリ4:19)。そして聖靈が祈りの力なのである(ロマ8:16、27)。また、私たちは、なぐさめを(IIコリ1:3-4)、喜びと平和(ロマ15:3)を祈るのである。

③そして、使徒パウロにとって、祈りは「とりなし」なのである。

¹⁷ Cf. Karris, R.J., *Prayer and the New Testament*. 2000.

¹⁸ Cf. Smith, C.W.F., "Prayer" *Interpreter's Dictionary of the Bible*. Vol. 3, pp.857-67.

G.P.ワイルズによれば、使徒パウロの祈りの中で、「とりなし」が大きな役割を果たしている。単純にその箇所を列挙するところである。

ロマ1:7b、9f.、8:15f.、23、26、34、9:1-3、10:1、11:2-5、12:12c、13、14、15:5f.、13、30-32、33、16:20a、20b。Iコリ1:3、8、2:9-16、5:3-5、11:10、15:29、16:22a、23。IIコリ1:2、7、11、14、13:7、9b、11b、14。ガラ1:3、8f.、4:6、6:16、18。フィリ1:2、4、9-11、19f.、4:6f.、9b、23。Iテサ1:1b、2f.、3:10、11-13、5:17f.、23、24b、25、28。フィレ3、6、2b、25。

使徒パウロにおいては、祈りは特に、聖靈によってその働きかけが効果あるものとされる。私たちは神の子として、「アッバ、父よ」と呼びかけることで(ロマ8:15、ガラ4:6)、私たちの靈と神との交流が成立するのである¹⁹。

さらに、私たちが祈るべき言葉を知らない時には、聖靈が言葉にならないうめきをもって、とりなしをしてくださることによって(ロマ8:26)、私たちは、祈りによる超自然的な力が働いていることを体験するのである。

ここでは、ローマ書に限定してみたい²⁰。ローマの信徒への手紙7~8章には、使徒パウロの祈りに関して、①「感謝」(7:25)、②「祈願」(「アッバ、父よ」と呼ぶ)(8:15)、および③「とりなし」(8:26)が出るからである。もっともR.ゲバウアーは、他にIIコリ6:2、IIコリ12:8、ロマ15:30-33、フィリ1:3-11の釈義を行っている²¹。

J.フィッツマイアに従って、7-8章の文脈を挙げてみよう²²。

7:1-6 キリストの死によって、律法からの自由(を得ている)。

¹⁹ TDNT, vol.II: p.805.

²⁰ Gebauer, R., *Das Gebet bei Paulus*. 1989. pp.113-198. フィリピ書に関しては、以下を参照。Karris, R.J., *Prayer and the New Testament*. pp.114-131.

²¹ ローマ書に関する研究として、次を参照。Nanos, M.D., *The Mystery of Romans. The Jewish Context of Paul's Letter*. (Minneapolis: Augsburg, 1996). Donfried, K.P.(ed.), *The Romans Debate*. Revised and expanded edition. (Peabody, Mass.: Hendrickson Publishing, 2003).

²² Fitzmyer, J.A., *Romans*. B 33. (New York et al.: Doubleday, 1993), p.454-538.

7:7-13 人間の生活における、律法の役割。

7:14-25 律法の奴隸とされている人間の不平と叫び。8:1-13 神の靈によって、力を与えられた、キリスト者の生活。8:14-17 聖靈によつて、キリスト者は、神の子とされ、栄光が約束されている。8:18-23 三つの事柄が、この新しい約束を証明する。被造物は、産みの苦しみの中でうめいている。8:24-25 キリスト者の希望の事実。8:26-27 靈でさえも（うめき、とりなしをする）。8:28-30 キリスト者は、栄光へと召され、約束されている。8:31-39 キリスト・イエスによって明白にされている、神の愛に対する賛歌。

すなわち、①使徒パウロは、7:25において、キリスト・イエスの死と復活によって、律法からの自由の状態にされたことを、その解答を8:1-4で期待しつつ、したがってここでは、その理由を挙げずに、神に「感謝」している。とすれば、使徒パウロの神学そのものが、祈りの神学としての感謝を基礎としたものであるということになろう。

ロマ7:25の「感謝」は、χάρις τῷ Θεῷ である。この表現は他に、ロマ6:17、Iコリ15:57、IIコリ2:14、8:16、9:15（参照 Iテモ1:12、IIテモ1:3）に出る。それは時に、無意識的な賛美の発出であつて、ギリシャ・ローマ的であると同時に、ユダヤ教的な表現でもある²³。

その意味では、本来使徒パウロに頻出する、「感謝」εὐλογέωは、別途考慮しなければならないであろう²⁴。

（3）祈りの機能とコミュニケーション

祈りの機能とは何を意味するだろうか。K.ベルガーに従つて、祈りの機能をいくつか挙げてみよう²⁵。その方法論は、様式史であろう。つまり、新約聖書および同時代の諸文書における祈りの分析なのである。

²³ 上掲書、p.219

²⁴ Elliott, N., *The Rhetoric of Romans. Argumentative Constraint and Strategy and Paul's Dialogue with Judaism.* (Sheffield: JSOT Press, 1990).

²⁵ Berger, K., "Gebet. IV: Neue Testament." *TRE* vol.XII. pp.47-60.

祈りには、まず①初期キリスト教における日常生活における祈りがある。たとえば、食卓の祈り（Iテモ4:3-4）、別れの時の祈り（使徒20:36、21:5）、罪認識としての祈り（マタイ6:12、使徒8:22「悔い改め」）、主イエスの到来を祈る（Iコリ16:22）、救出を求める祈り（マタイ6:13、ロマ15:31）、救済を求める祈り（ロマ10:1、フィリ1:19）、さらには神への嘆願（使徒4:24）などがある。（ベルガー、p.48-49）。

②天的世界とのコンタクトとしての祈りがある。こうした様々な祈りは、人間が天的（超越的な）世界と接触することなのである。たとえば、奇跡を求める（マルコ7:34、使徒16:25f.）、忘我状態（使徒22:17）、天的な賜物の認識（コロ1:9、ロマ8:26-27「とりなし手としての靈」）、天的存在への呼びかけ（「アッバ」ガラ4:6、ロマ8:15f.、マルコ14:36）、靈にあって喜びをもつての祈り（フィリ1:4、4:4-6、Iテサ5:17）、理性的解釈を求めつつ、異言での祈り（Iコリ14:13-15）などを挙げることができよう。

そして、③祭儀行為としての祈りがある。たとえば、誓願の祈り（使徒18:18、21:23）、ささげられる祈り（Iテモ2:1-3）、性的禁欲のための祈り（Iコリ7:5、Iテモ2:8）、神殿での祈り（使徒22:17）、断食の祈り（ルカ5:33）、施し（マタイ6:2ff.）などである。

さらに、④教会社会学的な側面に目を向けてみよう。聖靈自身が、祈りの教師である（ロマ8:26）、神は無条件で祈りを聞きたもう（ヤコブ1:5）、男女の預言者の祈り（Iコリ11:4-13）、共同体との再会を祈る（IIコリ9:14、フィレ22、IIテモ1:3）、すべての人々のための祈り（Iテモ2:1）、そして敵のための祈り（マタイ5:44、ルカ6:28、ロマ12:14）を挙げておこう。

最後に⑤勧告としての祈り、すなわち祈りは勧告でもある。「たゆまず祈りなさい」（ロマ12:12）、「絶えず祈りなさい」（Iテサ5:17）、「夜も昼も願いと祈りを続ける」（Iテモ5:5）などがある。誘惑に会わないように、常に祈り、その防衛に努めるべきなのである。

それでは、私たちは、現代においては、ポスト・モダン時代の中で、コミュニケーションとしての「祈り」はできないだろうか。

W.フェンスケによれば、祈りは、古代の人間間におけるコミュニケーションとしての祈りであり、敬虔の表現としての祈りである²⁶。とすれば、ここにはコミュニケーション理論があるだろうし、人間相互間のコミュニケーションあるいは対話としての祈りの機能が、明白であろう。すなわち、祈りにおける①文学的な機能、②コミュニケーション的な機能、そして③効用論的な機能に言及されるのである。

また、W.フェンスケは、祈りは、「敬虔の鏡」と規定している。すなわち、祈りは単に神、神的な超越者に向けられたものというだけでなく、その中に、コミュニケーションが含まれているのである。コミュニケーションの手段として、共同体における情報、感情、真理などが伝達されるのである。そしてそこに、私たちが、「敬虔の鏡」として、その人間の信仰や敬虔を見て取ることができるのである。

本来なら「対話」かもしれない。しかし、神との対話は、人間に言えば、一方通行である。そこでむしろ双方向的なものとして、祈りをコミュニケーションとして考えてみたいのである²⁷。すなわち、使徒パウロにおける生活世界は、すでにそれ自体で、ユダヤ教からキリスト教への動態であって、静的な分析を許さないが、まさにユダヤ教（旧約聖書およびタルムード）の祈りから、キリスト教の主イエス・キリストへの祈願・感謝・とりなしの祈りへと、独自の変移を経たのである。とすれば、コミュニケーション理論は、キリスト教の祈りに関しても、何らかの親和性を持つのではないだろうか²⁸。

III. 結び　—現代における祈り—

以上、拙いながら、使徒パウロの祈りについて考察してみた。それはまさに、紀元一世紀の祈りであるだけではなく、現代のこととしての祈りの考察なのである。

私たちにとっては、それはコミュニケーション理論と祈りとの相関性でもあった。しかしさらに精緻な釈義的な考察が必要であることは言うまでもないであろう。

現代の私たちも、21世紀という激動する新しい世界にあって、聖靈に促されてキリストと神への祈りに生かされている。使徒パウロの祈りの構造が、こうした社会学的分析が可能とされていると考えられるように、現代の私たちも、独自の社会の中でそしてキリスト教の中で、祈り続けたいのである。

(大阪キリスト教短期大学 助教授)

²⁶ Fenske, W., "Und wenn ihr betet … (Mt.6,5)" *Gebete in der Zwischenmenschlichen Kommunikation der Antike als Ausbruck der Froemigkeit.* (Goettingen & Zuerich: Vandenhoeck & Reprecht, 1997).

²⁷ J.ハーバーマス『コミュニケーション的行為の理論』（河上倫逸ほか訳）全3巻、未来社、1985－1987年参照。Cf. Fiorenza, F.S., *Habermas, Modernity and Public Theology* (New York: Crossroad, 1992).

²⁸ Cf. Guarino, T., "Postmodernity and Five Fundamental Theological Issues." *TS* 57(1996): pp.654－689. Garrigan S., *Beyond Ritual : Sacramental Theology after Habermas.* (Ashgate Publishing, 2004). Roest, H. de, *Communicative Identity : Habermas' Perspectives of Discourse as a Support for Practical Theology.* (Uitgeverij Kok, 1998).